ないが，口腔衛生の向上にかなり寄与できたものと思われる。他，広報や種々の集会の機会を利用して，啓蒙活動を行っているが，最も意識の低い，最も啓蒙の必要な層がいつも落ちこぼれている現状も否定出来ない。本当の意味の予防活動の展開はこれからだと思っている。

演題3．本学小児歯科外来における外傷患者の臨床的観察

○伊藤　雅子，野坂久美子，守口　　修，
小野　玲子，甘利　英一

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

昭和55年年ら60年までの6年間に当科外来を受診した小児外傷患者 255名について，外傷状態ならびにそれに対する処置内容，経過について検索した。その結果，乳歯外傷は 151人（ 264歯），永久歯66人（ 110歯）軟組織のみ37人であり，男女比はいずれも2：1で男子の方が高かった。年齢別の出現率は，乳歯では，1，2歳児が最も多く両者で約60%を占め，永久歯では，8歳児が約24%で最も高かった。歯種別は，乳歯では$\underline{A}$が最も多く64%，次いで$\underline{B}$16.3%，$\overline{A}$11.4%であり，永久歯では，$\underline{1}$ 80%，$\underline{2}$ 8.2%，$\overline{1}$ 7.3%の順であった。月別の外傷患者数は，乳歯では季節の変わり目に高い出現率を示したが，永久歯では月別の変化はあまり見られなかった。1人当たりの外傷歯数は，乳歯，永久歯ともに上顎において1歯が最も多かった。受傷から来院までの期間は，乳歯，軟組織では，1日目が最も多く，次いで当日であったが，永久歯では当日，1日目が最も多かった。受傷原因は，強打が32.6%と最も多く，次いで転倒の31.8%であった。外傷状態は，乳歯では脱臼が53%，永久歯では歯冠破折が45.5%で最も多く，歯根破折は，乳歯，永久歯ともに最も少なかった。外傷状態と歯種との関連性は，乳歯では完全脱臼が$\overline{A}$に多く，他の外傷状態はいずれも$\underline{A}$で最も高い出現を示した。永久歯では歯頸1/3の歯根破折を除いては，$\underline{1}$が最も高い出現であった。年齢別の外傷状態は，乳歯では不完全脱臼が1，2歳児に多く，永久歯では脱臼，動揺が9歳以前に集中していた。処置内容は，乳歯，永久歯ともに歯冠破折に対しては，充填，RJCr が多くを占め，不完全脱臼，重度動揺では，固定あるいは整復固定が最も多かった。また，抜歯は従来の報告に比べ非常に少なく，とくに乳歯で16.3%であった。乳歯の抜歯は，不完全脱臼では完全脱臼に近い重度のもの，歯根破折では歯頸1/3の部位のものが多かった。また，露髄，軽度動揺の抜歯は，1例を除いて全て1カ月以上経過してからの来院であった。

演題4．先天性多数歯欠損を伴う若年者の補綴処置の一例

○古川　良俊，佐藤理一郎，石橋　寛二，
中野　廣一*　石川富士郎*

岩手医科大学歯学部歯科補綴学第二講座
岩手医科大学歯学部歯科矯正学講座*

日常の臨床において，先天性の多数歯欠損症例に遭遇することは比較的まれなことである。今回，我々は15歯先天性欠損症例を経験したので，若干の考察を加えて報告する。

患者は18歳の女性で，前歯部審美障害を主訴に，昭和59年7月17日に岩手医科大学歯学部矯正歯科および第二補綴科を受診した。家族歴，既往歴，現病歴に特に問題になる点は認められない。前歯部から小臼歯部にかけて歯間スペースがあり，全体的に歯の倭小化傾向が認められ，欠損部位にX線写真上でも歯胚が観察されず，抜歯の既往もないことより，

Partial Anodontia（$\frac{8\ 5\ 4\ 2}{8\ 7\ 5\ 2}\Big|\frac{2\ 4\ 8}{3\ 5\ 7\ 8}$ 欠損）による空隙歯列および $\frac{D}{E}\Big|\frac{D}{CE}$ 乳歯残存と診断した。

本症例では，若年者特有の心理的特性（容姿に対する強い願望や劣等感）から，早期の審美性回復により心理的負担を軽減する必要があった。そこで，補綴前処置として歯の移動を行い歯間スペースを整理し，接着性レジンセメントを応用した暫間的橋義歯により審美性と咬合の回復を試みたところ，良好な経過を得ることができた。しかし，偏心位咬合誘導の確立が不十分で，口腔内環境が安定する4～5年後に，最終補綴処置で回復する予定である。

今回，このような症例にたずさわり，複数科によるチームアプローチの重要性が示唆された。

演題5．歯科処置に全身麻酔を必要とした症例の検討

○渋井　　暁，水間　謙三，佐藤　雄治，